

2025年 9 月 26 日

ランバス留学基金委員会 御中

所属：商学部
職名：准教授
氏名：森谷 周一

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	ランバス留学（滞在国：イギリス）
研究課題	ミドルマネジメントによる戦略的役割の解明及び戦略に貢献するミドルマネジメントの人材育成メカニズムの探索
研究実施場所	Alliance Manchester Business School
研究期間	2023年 9 月 17 日 ～ 2025 年 9 月 17 日（24ヶ月）

◆ 研究成果概要（2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

2年間のマンチェスター大学ビジネススクール（Alliance Manchester Business School）でのランバス留学では、受け入れ担当教員であるArjan Keizer氏との共同研究を中心に、複数の研究活動に従事した。第一に、留学開始直後に、私が留学開始前も含めて執筆していた、人的資源管理施策の定着に関する論文を提示し、それを基にディスカッションを行った。その結果、Keizer氏のフィードバックを通じて修正された論文は、商学論究にて公刊された。（「人事部とライン管理者の共同的運用を通じた人的資源管理施策の定着」商学論究 71（4），159-172，2024。）

第二に、留学者が筆頭著者として、海外ジャーナルに投稿・掲載を目標とする英語論文を執筆した。リサーチクエスションの提案や分析枠組みの構築等、研究の基礎にかかわる部分のアイデアは留学者が中心に行い、データの解釈や分析視角の適切性の評価、ジャーナル掲載に向けた実務的なアドバイス、英語表現の修正等はKeizer氏が担当した。留学者にとって、海外トップジャーナルへの投稿は初めての経験であり、執筆過程での困難や課題を解決することに多くの時間を要したが、2年間の共同研究によって論文は完成間近である。2025年9月現在、その論文は公刊に至っていないが、10月頃に投稿を開始し、1、2年以内の公刊を目指している。

第三に、共同研究の過程で新たに設定された、日系海外現地法人を対象とした研究課題について、調査を実施し研究データを得た。Keizer氏との議論の中で派生的かつ新たに発生した、人的資源管理の運用における日本人出向者の役割に主眼を置いたテーマにアプローチするため、在欧日系企業にインタビューを実施した。留学期間中は、データの収集および分析に従事した一方で、複数企業からより豊富な研究データを得ることが分析の信頼性担保という観点から望ましいことから、帰国後も引き続き同研究対象からデータを収集・分析し、将来的な論文公刊や学会発表に繋げる計画である。

留学期間中は、Arjan Keizer氏との共同研究以外にも、国内外との研究者との関わりの中で、複数の研究活動に従事してきた。第一に、留学者の専門分野である人的資源管理の運用に関する研究書を、複数の研究者と共同で執筆・出版することとなった（Bos-Nehles et al. (eds). The Edward Elgar Research Handbook on HRM Implementation, In press）。2026年の出版を予定している同書では、留学者はチャプターの1つの執筆を担当し、共著者の中では唯一の日本人ということもあり、同テーマの日本的な特質を中心に論考を加えている。

第二に、海外向けに日本の人的資源管理の特徴に関するテキストを執筆・出版するプロジェクトの一員として、共同研究者とともにチャプターの1つを担当した（Kambayashi (ed.) Human Resource Management in Japan, Springer）。ランバス留学期間中に日本企業へのインタビュー調査を実施し、その内容をもとに、日本の人的資源管理における現代的なテーマである人的資本経営の有効性と課題についてまとめた。

以上のような研究成果に加えて、留学期間中の研究資金獲得に関連する成果として、留学者は2つの科学研究費助成事業に採択された。1つは基盤（C）であり、当該留学における主要な研究テーマである、人事部とライン管理者による人的資源管理の運用について研究計画を策定した。特に本研究は、前者が後者に対して能動的に構築する社会的資本の構築と活用という観点から分析枠組みを構築することで、人的資源管理の運用研究に新たな知見を加えようとするものである。もう1つは、基盤（C）の研究課題を基課題とした、国際共同研究加速基金への採択である。本研究課題は、Keizer氏との共同研究を通じて導出された研究計画を柱とするものであり、当該基金によって留学期間中のみならず、帰国後の円滑な共同研究遂行が期待される。以上のように、ランバス留学期間においては、論文や書籍といった、直接的な研究成果のみならず、外部の競争的資金獲得においても、成果を残すことができた。留学期間終了後も継続して海外の研究者との共同研究を継続させるためには、一定規模以上の経済的基盤が必要なことから、留学期間中にこの研究体制を構築できたことには、研究の中長期的発展という観点で大いに意義があると考えられる。

以上のように、ランバス留学期間の2年間を通じて、研究論文の出版、継続的に研究を遂行するための基盤の構築、海外研究者とのネットワーク構築・活用など、多岐にわたる成果を獲得することができた。

以 上

提出期限：留学期間終了後2ヶ月以内

- ◆研究成果報告は、関西学院（大学/学院）ホームページにて公開します。研究遂行上ホームページでの公開に支障がある場合はランバス留学基金事務局までご連絡ください。